

日本学術会議 科学者委員会 研究評価分科会

第 26 期・第 5 回

議事要旨

開催日：令和 7 年 9 月 3 日

開催形式：オンライン会議

出席者：尾崎紀夫委員長、関谷毅副委員長、林隆之幹事、柚崎通介幹事、森和俊委員、坂田省吾委員、佐々木結委員、竹沢泰子委員、岡村康司委員、標葉隆馬委員、林和弘委員、新澤裕子委員、事務局

1. 開会挨拶

尾崎委員長より挨拶と委員会開催の趣旨説明

出席状況が報告され、定足数を満たしていることを確認

2. 提言書案の概要説明

林隆之幹事より、事前に配布済みの提言書案「研究の活性化へ向けた研究評価の具体的な改善方策」について骨子の説明が行われた。

提言の骨子：

- 研究者個人および研究プロジェクトの評価に焦点
- ナラティブ CV 導入、ピアレビューの高度化、多面的活動の評価、若手研究者に適した評価、社会的インパクト評価、産学連携評価、実験的手法導入、オープンサイエンス基盤整備など
- 上記を踏まえた 6 つの政策提言 を提示
(＊詳細については、参考資料を参照)

3. 提言申出書に対する科学的助言等対応委員会からの意見とそれを踏まえた修正点の確認 (尾崎委員長)

- 評価対象の明確化（個人中心）
- 研究評価と研究力向上の関連性を記載
- 評価における AI 活用は「試行的」であることを明記（誤解防止）
- 大学団体との調整は今後の課題(発出後のアクションに含む)

- 若手アカデミーや産業界からの意見を反映
- 海外事例を国内にそのまま適用することは困難であることを記載
- 発出後のアクション計画の重要性を指摘

4. 主な討議内容

(1) 定量指標の扱い

- 立法府が取りまとめた事例について紹介
- 国レベルでの数値目標と、個人評価を混同しないことが重要。DORA も同様の立場
- 提言本文に「本提言は個人評価を中心とし、定量指標は全否定せず、使用場面を明確に区分する必要性を明記」。
- 上記の趣旨に則り、提言書に記載する方向で一致

(2) 対面審査の重要性

コロナ以降オンライン審査が常態化し、研究計画や意欲を十分に議論できない問題を指摘

- 評価者の負担・報酬水準の見直しも必要との意見
- 発出後のアクションにおいて、インタラクティブ性を重視し、報酬や制度面を関係省庁と議論すべきとの認識を共有

(3) 質的評価と専門人材の育成

- 質的評価の重要性に賛同。ただし、定量指標に慣れた関係者をどう説得するかが課題であり、今後の取り組みが重要との方向で一致
- 研究評価専門家の育成必要性を提起
- 学術会議や大学協会における URA や調査専門人材の役割強化が有効と説明
- 人文系研究者の立場からもナラティブ CV 導入に賛同。URA の存在が制度改善に資するとの意見。URA の中からさらに高度な専門性を持つ人材が育成される可能性があるとの意見。

(4) 社会的インパクト評価と産学連携

- 数値評価は分かりやすいため強調されがちであるが、それに偏重することなくナラティブの重要性を繰り返し提言する必要がある
- 省庁間・大学間の壁が研究評価改革を阻害しており、流動性の確保と制度横断的な調整が必要と指摘

5. 今後の対応

- 提言書案は本日の議論を踏まえ、誤解を避ける修正（定量指標の扱い、人材育成の記述など）を加筆：委員長・副委員長・幹事等に対応
- 大幅改訂ではなく微修正とし、速やかに査読に付す
- 発出後は関係省庁へのアウトリーチを積極的に実施予定

6. 閉会

- 尾崎委員長より謝辞
- 近く査読に付し、年内の発出を目指す方針を確認

以上